



一膳飯屋
人情話

逃げてきた娘

落書 福太郎

逃げてきた娘

今年もあと三日。八時半刻（午後三時）、浅草界隈は、新しい年を悔いないように迎えようと、人々があわただしく動き回っていた。浅草寺に続く道に沿った店の多くに、門松やお飾りが取り付けられていた。

その中の一軒「四文屋」と書かれた高障子戸を、娘が開けた。鈴が、鳴った。

「すみません、まだなのですが」

銀之助は、勝手場から出てきた。

「御主人、何か食べ物を……」

髪を乱し、汚れた木綿をまとった娘が、入口に茫然と立っていた。

銀之助は、驚きながらも言った。

「さあ、入って。そこに座んな。大したもんはまだないが」

銀之助は、勝手場に行って、すぐに煮豆を持ってきた。

娘は、皿を抱え込んであっという間に食べ終わった。銀之助は、さらに菜飯と茶を運んできた。それもすぐに食べ終わった。

「まだ、食べられるかね」

「いやもうお腹いっぱいです。ありがとうございました」と娘は言ったきり、黙ってしまった。

「娘さん、名前は」

「おさとです」

また、沈黙が続いた。

「おさとさん、どこから来たんだね」

「秩父からです」

なぜ江戸に来たかと聞くと、秩父ではこの飢饉で餓死者が出て死者がたくさん出たことや、女衞に若い娘たちが売られて行ったことなど、やっとポツリポツリと話し始めた。

しばらく、銀之助は、おさとの話を聞いた。

(田舎は、大変なことになっているんだな)

銀之助は、おさとを勝手場に連れて行って、百文を手渡した。

「おさどさん、これで着物を買って、湯屋に行ってきたな」

おさとは、何度も頭を下げながら、礼を言って、裏口から出て行った。

銀之助は、あちらこちらの行灯に灯を入れた。

すぐに、最初の客が、障子戸を開けて入ってきた。

「いらっしゃい」

「味噌田楽と酒二合、頼む」

「はい」

その客に続き、客が入れ代わり立ち代わりやって来て、応対に銀之助はてんてこ舞いであった。

半時（一時間）ほどたって、湯屋から戻ったおさどが、店を覗いた。

(お客さんが、いっぱい)

そして、勝手場に行った。

「御主人、手伝わせてください」

おさとは、言った。

「おさとさんかい」

先ほどのみすぼらしいおさととは、見違えるような美しい娘に変っているのに銀之助は驚いた。

「ちょっと待って」と銀之助は二階から襷と前掛けを持ってきて、おさとに渡した。

黄の小袖に紺の前掛けは、おさとに似合っていた。

「おさとさん、この銚子、奥の席にいる二人組のところに運んでくれませんか」

「はい」

おさとは、てきぱきと銀之助の言うことに従って、こまめに働き回った。

夜五ツ（八時）、客が誰もいなくなったので銀之助は店を閉めて、片付けはじめた。

おさとも銀之助にならって、客の使った銚子や皿を片付けた。

片付けも終わり、行灯の灯も近くを残して落とし、二人は長椅子に腰を下ろした。

「おさとさん、これからどうする」

「御主人、実は……」

「なんだ」

「ええ、ここで働かせてもらえませんか、飯だけ食べさせてもらえばいいんです」

「おさとさんが、よければいいよ」

「一生懸命やります」

「分かった、じゃあ、やってみるか」

「御主人、ありがとうございます」

「これからどうする。寝るところはあるの？」

おさとはい、黙った。

「今夜はここへ泊ってけ。明日、住む場所を探してやろう」

「何から何まで、すみません・・・」

銀之助は、おさとに留守をに頼み、湯屋に行った。

銀之助とおさと二人は、朝餉として、卵ふあふあと蜆の味噌汁を食してから浅草寺の裏手の自身番に向かった。

銀之助は、自身番の障子戸をおはようございますと挨拶しながら開けると、源治が二人を迎えた。

「銀之助さん、朝早くからどうしたんだね」

「へい、御相談したいことがあるもんで」

銀之助は、おさとを紹介し、おさとの住む所がないかと源治に尋ねた。

「そうだな、徳さんの長屋が空いているかもしれん、おーい、徳さん」

奥から、徳衛門が出てきた。

「おはよう、銀之助さん。源治さん、どうしたのかね」

銀之助は、おさとを徳衛門に紹介した。

源治は、徳衛門におさとのことを話した。

「おさとさん、ちょうど一軒空いているんだが、うちの長屋でよかったら、いいよ」

おさとは、銀之助の顔を見てから、徳衛門に向かって

「お願いします」

と言って、頭を下げた。

「おさとさん、俺もちょっと前までは、徳衛門さんの長屋に世話になっていたんだ。長屋の住人は、いい人ばかりだから、安心しな」

銀之助は、ほっとしたように頷いた。

銀之助とおさとは、徳衛門に連れられて、長屋に入った。

家は、こぎれいにされていた。

「おさとさん、今日、明日で、道具をそろえたらいい。あさって、明け五ツ（八時）に店に来てくれ」と言って、銀之助は、二百文をおさとに渡そうとした。

「こんなにもらっては」

「昨日の手間賃だ、遠慮はいらねえよ。布団や鍋釜、買いな」

江戸は、大晦日を迎えた。朝早くから、「おうぎ、おうぎ」と扇売りが、何度も四文屋の前を通り過ぎて行った。店の勝手場では、銀之助が、年越し蕎麦を打ち、おさとが、切り、粉をつけて、一人前ずつ分けていた。

二十人前ぐらい作り終えた。そして、銀之助は、休むもなく、餅をふかし始めた。

「おさとさん、餅つきはしたことがあるかね」

「はい、田舎で毎年、家でやってました」

おさとの目から急に涙が、こぼれ始めた。

銀之助は、おさとの身の上に同情し、話しかけるのをやめた。

(泣きたいだけ泣かせてやろう)

「御主人、すみません」

銀之助は、昨日洗った臼と杵を店の外に運んだ。

「おさとさん、ふけたら、餅を持ってきてくれ」

「はい」

銀之助とおさとは、餅つきを始めた。最初はぎこちなかったが、すぐに二人の呼吸は合った。

「おさとさんは、こねるのがうまいな」

「御主人はつくのが、上手ですので」

わいわいと、近所の子供たちが集まってきた。

「おじさん、やらせてよ」

「よし、やってみな」

子供は腰をふらつかせながら、何とか振り下ろすことができた。

皆、笑ってみていた。

つきあがった餅を二人で丸め始め、出来上がったものを子供に与えた。

「おさとさん、残った餅は、正月、我々が食べたり、お客に出したりしよう」

昼になり、店を開いた。

ひっきりなしに、年越しそばを食べに客が入ってきた。

銀之助とおさとは、ひと息も付かずに働いた。

やっと、夜五ツになって店を閉めることができた。

「おさとさん、ご苦労様。また来年四日からよろしく」

「はい、こちらこそよろしく申し上げます」

おさが帰って、急に静けさを銀之助は感じた。

銀之助にとって、『四文屋』で正月を迎えるのは初めてであった。

銀之助は、一人で元日を迎えた。

江戸は、天下晴れだ。

さっそく、浅草寺へ明け六ツ（朝六時）に詣でた。

もう既に、人盛りだった。

銀之助は、一すくい煙を体に浴びせそして、本堂に上がり、

（本年も良い年でありますように）合掌した。

「銀之助さん、本年もよろしくな」

和尚が、銀次郎を見つけ言葉を掛けた。

銀次郎も挨拶をし、ここで働けるのは、和尚様のおかげだと言い、また、おさとのことを手短かに話した。

「銀之助様、それは良いことをしおった」

しばらく世間話をして、寺を辞去した。あてもなく、銀之助は歩いた。腹が空いてきたので、近場の蕎麦屋に入って、天麩羅そばを食べた。

（これは、うちよりうまい、二八か）

銀之助は唸った。

三が日は、独りであちらこちらの寺社に詣でて、暇をつぶした。

四日、銀之助は、勝手場で昼の準備をそして、おさとは、店前の通りを掃除していた。

「あんた、秩父にいたおさとさんかい」

おさが顔を上げると、顎から耳元まで百足（むかで）が張りついたような傷を持った顔の男が立っていた。

「どちらの方？」

「あんたの親父に金貸した、金貸しの丸金の助五郎というもんだが」

「何の用ですか」

「金を親父さんが返さないで死んじゃったもんだから、あんたに払ってもらおうとな」

「おとっつあん、いくら借りてたんですか？」

「十両なんだが、一年たったもんだから、三十両になっちまったんだ」

「三十両、そんな！」

「払えなけりゃ、あんたの体でもいいんだよ」

おさとは驚いた。

銀之助が近づいて来たのを機に、助五郎は着物を端折っておさとから離れて行った。

「おさとさん、あいつは誰だい？」

おさとは黙った。

「言いたくなけりゃ、いいよ」

銀之助は、店の中に入って、まずは蒟蒻の田楽を作るために、蒟蒻をいくつも長方形に切って、

串を通し始めた。

(あいつはやくぎ者だな。正月から、厄介なことが起こりそうだ)

おさとも勝手場に入って来て、銚子、徳利、茶碗を出し始めた。

(あの助五郎ってやつ、またきつと来るわ。どうしよう)

ガチャアーン

「すみません」

おさとは、泣きそうな顔をして言った。

「気にしなくていいよ」

おさとは慌てて、割れた茶碗を拾った。

「おさとさん、田楽のたれを作ってもらえないか」

「はい、どうしたらいいんですか」

「その棚にある、味噌、そして、少々水飴、酒、みりんを入れ、弱火でよく混ぜてくれ。

水や、みりんを適当な硬さを、いいやこれからは俺が見るから」

「どうですか、味は？」

「いい味だ。おさとさん、木綿豆腐と大晦日に練馬から仕入れてきた大根を切ってくれないか」

昼九ツ、‘一膳飯屋 四文屋’の今年最初の店開きの時間になった。外には、客たちが並んで寒空の中で列を作って並んでいた。

銀之助とおさとはてんてこ舞いだった。

だんだん客が少なくなって来たなどおさとが思った時、あの男（金貸しの丸金の助五郎）が入ってきた。

おさとは、逃げるようにして、勝手場に入った。

「おーい、この店は注文を取りに来るのも時間がかかるのか」

「へーい、今、行きます」

銀之助は、返事を勝手場でした。

「おさとさん、もう店には出なくていいから。二階に上がってな」

「御主人、すまねえ」

「すみません、お待たせしました」

「酒二合と豆腐と蒟蒻の味噌田楽二本ずつだ」

「へい、ありがとうございます」

銀之助は、勝手場に行き、手際よく田楽に味噌をつけ、温めた酒をちろりに二合入れた。

「お待たせしました」

「今度は、早えな」

銀之助が勝手場に戻ろうとした時、

「ちょっと待ちねえ」

「何か御用で」

「今日は、娘はいねえのか」

「ちょっと出かけてますが、何か」

「いや、なんでもねえ」

(しつこい野郎だ)

「他に何か」

「また呼ぶから、もういいぜ」

銀之助は、勝手場に戻り、客にふるまう雑煮を作り始めた。小松菜・大根・里芋が醤油味のすまし汁に、焼いた切り餅六つを入れて温めた。

六つの椀に、手際よく温まった雑煮を入れ、客たち一人ひとりに運んだ。

「銀之助さん、これ頼んでないよ」

「祝いの雑煮ですから、銭はいりません」

「そうか、御馳走になるか」

そして、最後にあの男のところに行った。

「雑煮いかがですか、これは祝いの雑煮ですので、銭は戴きませんが」

「もらおう」

丸金の助五郎は、盃をおいて言った。

銀之助は、椀を置いた。

「ほう、この雑煮は珍しいな」

「へい、これは家康様が江戸に来られて、譜代の家臣達に贅沢しないよう戒めるために考え出した雑煮でございます。江戸っ子はこの雑煮をよく食べていますが、江戸は、他国の者が多く皆自国の雑煮で正月を祝っているので、地元の江戸の雑煮を知っている方は少ないのです。」

「もう分かった。あんた、名前はなんていうんだ」

「銀之助と申します。お見知りおきください」

「ところで、娘はいつ帰ってくるのかね」

「ちょっと、出かけてくるといったんですが」

と言って、銀之助が立ち尽くしている間に、男は、一気に雑煮を食べつくした。

「ちょっと待て、いくらだ」

「へい、二十四文で」

「また来るからな」

三十文おいて、丸金の助五郎は帰って行った。

客が、一人もいなくなったので、銀之助は店を閉めた。二階からおさとが下りてきて、銀之助の片づけを手伝った。

「御主人、お話があるのですが」

「ここでいいかい」

銀之助は、樽に腰を掛けた。おさとは、金貸しの助五郎から聞いた話を怯えながら話した。

「借りた十両が、三十両だと。高利もいいところだ。おさどさんは、おとつつあんが借金していたことを知ってたのかい」

「いいえ、何も聞いてません」

「身寄りはないのかね」

「上州にじいちゃんとはあちゃんがいます。まだ、生きていればですが」

「分かった」

「御主人、ご迷惑かけてすみません」

「今日は、ここへ泊って行った方がいい、明日早く、長屋においらが送って行こう」

朝七ツ、銀之助は起きて、腰高障子戸を開け外の様子をうかがった。まだ暗く、人っ子一人いない。星が、黒い空で震えている。

(よし、行くか)

銀之助は、階段の途中から、声を出した。

「おさとさん、起きな」

「ウ～、御主人」

「長屋に帰るぞ」

「はい」

おさとは、起き上がって、夜着を脱いだ。

銀之助は、階段を下りた。

おさとは、黄の小袖の上に紺の打掛をまとして、裏口に来た。

銀之助も外の闇に埋もれるように、紺下地の縞物小袖にこげ茶の羽織を着ていた。

二人は、前掛けを頭巾代わりに頭にかぶり、そして、銀之助が戸を開けながら言った。

「さあ、行くか」

二人は、店を後にした。

浅草寺を抜けたところで、銀之助は後ろを振り返りつけられていないことを確かめ、提灯に火を入れた。

身体が冷え切った二人は、棟割りの徳衛門長屋に着いた。銀之助は、浪人の橋本順之助の住んでいる家の腰高障子に向かって、声を掛けた。

「銀之助です。おはようございます」

「銀之助さん、こんなに早くどうした」

橋本が戸を開けた。

「寒いから早く入んな」

「こんなに早くすみません」

「一体どうしたんだ。まあ、上がって温まってくれ、きたない部屋だが」

すぐに布団を三枚にたたみ、隅にあった櫓を横にどけ、火鉢を真ん中に持ってきた。

「ちょっと、火を起こしてくるから、待っていてくれ」

橋本は、外に出た。そして、燃えた炭を、火鉢に入れた。

銀之助は、櫓を火鉢の上に置いた。おさとは、その上に布団を掛けた。

「さあ、お二人さん、入った、入った」

三人は、炬燵に入った。

橋本順之助、神田にある回転流で有名な畑中道場の師範格の一人であった。背丈は、五尺三寸ぐらいで大きい方ではなく、太っており、顔は丸くその中に愛嬌のある鼻が目立つ顔立ちであった。どこから見ても、強そうな侍には見えなかった。

「橋本様、お願いがあって来たんです。実は、このおさとさんが金貸しから狙われてんです」

銀之助は、おさとから聞いた話、金貸しの丸金の助五郎の人相などを立て続けに話した。

黙って聞いていた橋本は、銀之助が話を切った時に訊ねた。

「銀之助さん、それでそれがしにどうしろと」

「へえ、橋本様におさとさんの祖父母の住んでいる上州へ、おさとさんを送って行っていただけないかと」

「それはいいが、あの悪徳金貸しに悟られると厄介になりそうだな」

「隣のおすみさんに、身代わりになってもらおうかと思っているんですが」

銀之助は、簡単に自分の立てた策を二人に話した。

「よし、分かった」

橋本が、おすみの家との壁を叩いた。

「おすみさん、橋本だ。銀之助さんとおさとさんも一緒だ。ちょっと、相談があるんだが」

しばらくすると、障子戸が開いて、うす桃色の小袖を着て、雀鬢に小満島田髷の質素な姿のおすみが、入って来た。

「おはようございます。お三人そろわれてどうしたんですか・・・」

おすみは、浅草山谷の料理屋‘八百善’に仲居として働いていた。二十代後半で、独り身であった。

「おすみさん、座ってくれ」

「まあ、お茶も出さないで、いま、お茶を入れますから」

竈に行って、茶を土瓶に入れて 盆の上に茶碗を乗せ三人の前に置いた。

「朝から、一体どうしたんです」

「朝早く、申し訳ない。実は銀之助さんからおさとさんのことで頼まれ申してな。銀之助さん、後を頼む」

橋本は、茶を手にとった。

「へい」

頭を下げてから、銀之助は、橋本に話したことをおすみに話した。

「ようござんす、やらせてもらいましょう」

おすみの気性が、言葉に表れていた。

「ありがとうございます。この企ては危険が伴っておりますので、お二人とも十分注意してください」

「なに、おさとさんや銀之助さんに比べりゃ、大したことはありませんよ」

おすみは微笑んだ。

「三人とも気を付けられよ」

橋本は、おすみの顔を見て言った。

「では、先ほど言いましたように、明日決行しますので、よろしくお願いします」

銀之助とおさとは二人に頭を下げた。

そして、おさとは、この間住み始めたばかりの九尺二間の家に物を取りに行った。

続いて、おすみが手伝いに入った。

銀之助は、橋本の家で待つことにした。

「銀之助さん、軽く一杯どうかな」

「いや、これから戻って、店の準備をしなくてはならないので。申し訳ありません」

「では遠慮せずに、それがしは一杯」

と言って、土間に下り、徳利と茶碗そして、八つ頭、牛蒡、干し椎茸、人参の煮しめが入った鍋を持ってきた。鍋を火鉢の上に置いた。

「寒い時は、これに限る」

「橋本様、ちょっと厠に行ってきます」

銀之助は、障子戸を開け、まだ誰もいない井戸端を通り抜けて、厠に行った。

用を足し終わって出た時、鳶職人の源一の家から女房のおつたが出てきた。

「銀之助さん、こんな朝早くから一体どうしたのよ」

「おはよう、おつたさん」

銀之助は困った。おさとが、世話になっただけでなく、銀之助もこの長屋に住んでいた時にはいろいろ面倒を見てくれた、世話付きのおつただが、おしゃべりで、徳衛門長屋の瓦版とも言われていた。

(正直に言ってしまおう)

「実は、おさとさんのことで、橋本様とおすみさんをお願いに来たんだ」

そう言って、銀之助は、かいつまんでおつたに話をした。

「そうだったの、あたしに何んかできることあったら、遠慮なく何でも言ってよ」

と言って、おつたは井戸の水を桶に入れて家に戻って行った。

間もなく、おつたが出てきて、おさとの家に入った。

「おさとちゃん」

「あら、お婆さん」

「おさとちゃん、出て行くんだってね。元気でね。これ持ってて」

おつたは、簪を渡した。

「お婆さん、こんな大事なものをいいの」

「いいんだよ。もうあたしのような年増じゃ挿すことはないんだから。挿してみなよ」

おさとは目を潤ませて、髪に挿した。

「おさとさん、似合うよ」

「おばさん、ありがとう」

おつたは、また家に戻って行った。

「そうか、おつたさんに言ってしまったのか」

銀之助から話を聞いた橋本が、諦め顔で言った。

しばらくして、おつたがお櫃を持って、入って来た。

「みんな、まだご飯食べていないんだろう」

「橋本様、酒ばかり飲んでいないで、早くみんなの茶碗お出し」

「橋本様は、この後大事なお仕事があります、私が取ってきます」と、おすみは腰を上げた。

それと同時に、おさとが行李を背負って、入って来た。

銀之助とおさとは、朝餉を食して、四文屋に戻った。

五ツ、いつものように‘四文屋’の朝が始まった。

「おさとさん、茶飯と玉子ふわふわそして、いつもの味噌田楽を作るよ」

「はい」

「茶飯の作り方なんだが」

「あたし、知ってます。米にほうじ茶を加えて炊き上げればいいでしょ」

「そうだ。頼む。」

しばらくして、おさとはたまごふわふわについて聞いてきた。

「これは、知らんだろうね。まずだし汁を煮立てて、そこにかき混ぜた卵を落としてから蓋をするんだ。そうするとすぐに卵がふわっと盛り上がってくるんだ。それで出来上がりだ、簡単だろう。」

「へえ、おいしそうですね。」

「おさとさんのおじいさんとおばあさんに作ってやると、きっと喜ぶよ。だし汁の作り方は、あそこの引き出しの帳面に書いてあるから、見ながら作ってくれ。」

「はい」

昼時になった。

「おさとさん、これが最後だ。九時半頃に橋本様たちが店に来る。あいつも来るだろうから、いつものように振る舞ってくれ」

「はい、御主人。大変お世話になりました」

「さあ、暖簾をかけておくれ」

銀之助は、壁に茶飯、玉子ふわふわそして、味噌田楽そして、酒の札をかけた。

昨日までと違って、家族連れは少なく、職人姿や前掛けをかけて商人たちが、昼餉を取りに、入れ替わり立ち代わり入ってきた。

入って来た客に、おさとは力を振り絞って、大きな声で迎え、注文を取った。

半時ほどして客足が途絶えた時、銀之助は障子戸を開け、外をうかがった。

道角に人影を見た。

(あいつだ。ここを見張っているな)

「おさとさん、二階に上がっていな」

銀之助は、勝手場に戻って来たおさとに声を掛けた。

おさが、二階に上がった直後、助五郎が、手下を連れて店に入って来た。

「いらっしゃい」

「おい、娘が来るまでここで待たせてもらうぜ。酒二合と、味噌田楽四本」

「どうぞ、ごゆっくり」

銀之助は、勝手場に戻った。

しばらくして、紫の御高祖頭巾（方形の布に耳掛けのひも輪をつけたずきん）で顔を覆った女が入って来た。

「いらっしゃいませ」

銀之助は、勝手場を出て、女を迎えた

「何にしますか」

「茶飯と玉子ふわふわをお願いします」

「はい」

続いて、二人とも編笠をかぶった侍風の男と女が入ってきた。女は、荷を背にしよっていた。

「いらっしゃい」

勝手場に戻ろうとした銀之助が、声を掛けた。

席に座るや、編笠をかぶった女は、厠はどこかと銀之助に尋ねた。そして、荷物もおろさず、奥の階段から二階に上がった。編笠を外したのは、おすみだった。

「おさとちゃん、早く着替えるのよ」

二人は、着物を脱ぎ相手の着物に着替えた。おさとは編笠をかぶる前に、おすみに両手を合わせた。

「いろいろありがとうございました」

「いいのよ、お互い様じゃない。困ったことがあったら、また来てね。早く、橋本様のところに行って」

おさとは、奥の助五郎を見ずに、侍の所に行った。助五郎は、味噌田楽をつまみに酒を飲んでいた。

侍が、おさとに声をかけた。

「おたか、ここには鰻はないんだとよ。他の店に行こう」

「お客さん、すみません。またお越してください」

銀之助は、二人に頭を下げた。

(橋本様、よろしく頼みます)

二人は、四文屋を出て行った。

御高祖頭巾の女は、銀之助に二言三言話をして、厠へと向かった。

しばらくして戻ってきて、勘定をすませ、店を出て行った。

奥にいた助五郎は、ずっと二人を見ていた。

銀之助は、助五郎を一瞥して、勝手場に戻った。

勝手場では、着替えをしたおすみが茶碗を洗っていた。

「すまねえな、おすみさん」

「いいんですよ。お互い様じゃないですか。奥にいるのが悪徳金貸しですか」

「ええ、丸金の助五郎って奴です」

「顔付が、いかにも悪党って感じですね。おさとさんも生きた心地しなかったでしょうね」

「そうなんだ。いつも怯えていましたよ」

「橋本様、いつごろ戻ってくるんでしょうね」

「そうですね、何もなければ、四日後くらいでしょうか」

「おーい、誰かいねえのか」

助五郎のどなり声が、勝手場まで響いた。

「あの人だわ、私が行ってきます」

おすみは、いやな顔して言った。

「気を付けてください」

銀之助は、心配そうだった。

「はい。いま行きます」

おすみは、大声で返事をした。

「何か御用ですか」

おすみは、笑顔を浮かべて助五郎に言った。

「あの娘はどうした？」

「あの娘って、どなたのことですか」

「ここで働いていたおさとだよ」

「すみません、来たばかりで」

「役に立たねえ女だ。主を呼んで来い」

「はい、ちょっとお待ちください」

おすみは、勝手場で椀や皿を片付けていた銀之助に助五郎が呼んでいることを伝えた。

「そうか、気づかなかったようだな」

と言って、助五郎のところに赴いた。

「お客様、何か御用で」

「おい、娘はどうしたんだ」

「へい、この間も言いましたように、まだ帰ってこないんです」

「嘘も休み休みつけ、昨日、長屋からお前と娘が、この店に戻ってきたのをこいつが見たんだ」

手下が頷くと、首すじに入れ墨が、見えた。

(見られていたか)

「あれは、おさとさんじゃありません」

「とぼけやがって。もしかして、先ほど紫の御高祖頭巾の女か。えー、どうなんだ」

助五郎は、そばにいた手下に顎を杓った。

手下は、着物を端折って店を走り出て行った。

助五郎は立ち上がり、銀之助の襟元を掴んだ。

「お客さん、店の中でこんなことは困ります」

「じゃ、娘がどこへ行ったのか教えろ」

「私は、知りません」

「しゃべるように、それなら痛い目に合わせてやろう。外へ出ろ」と襟元を掴んだまま、銀之助を店の外に引きずり出した。

銀之助は、出された時、すぐに障子戸を閉めた。おすみは、勝手場から出てきて店にいる客になんでもないから気にしないでくれと言って、障子戸を三寸ほど開けて外を覗いた。

銀之助は、障子戸閉めた時、襟元を掴んでいた助五郎の両手首を握って、外側に捻った。

「いてえ〜」

銀之助は、助五郎の足を払った瞬間、ドスンという音を立てて、地べたに尻もちをついた。

「やったな」

助五郎は、立ち上がろうとしたが、腰を打ったせいで起き上がれない。

「お客さん、おさとさんにいったい何の用なんですか」

「うるせえ、あいつの親父が借金を残して死んだんで、おさとに肩代わりしてもらうんだ。分かったか」

「そうだったんですか。その証文は、あるんですか」

「そりゃ、あるに決まってらあ」

「見せてもらえませんか」

「そんな大事なもん、見せるわけにはいかねえ。覚えてろ」

助五郎は、何とか立ち上がり、足を引きずりながら去って行った。

銀之助は何もなかったかのように、店に入り、覗いていたおすみと一緒に、客に笑みを絶やさずに頭を下げながら、勝手場に戻った。

客たちは、驚きを隠さずに銀之助を見ていた。

「銀之助さん、大丈夫。強いよね」

「ええ、あいつが弱いのです」

「でも、いつか、仕返しに来るかもしれないわ」

「すぐに来るでしょうね。おさとさんが、遠くに逃げてしまわないうちにと思っ」

「おすみさん、大丈夫ですか」

「ええ、八百膳の時もこんなことがたまにありましたので、慣れてはいませんが大丈夫です」

「そうですか、じゃ、今日はもういいですから、今、賄の飯を作りますんで、食べて、帰って下さい」

銀之助は、残り物とありあわせの物で、おすみに昼餉を作った。

今日から、四文屋は夜も店を開く予定であったので、銀之助も急いで食べた。

「銀之助さん、いつもこんなに多くのお客が来たら、一人じゃ大変じゃありませんか。また、夜もやるなんて」

「おいらは、料理を作って客がおいしいと言って食べているのを見るのが好きなもので、大変なんて思ったことはありません。でも、もっと店を大きくしたいので、おさとさんが来てくれた時は……。おすみさん、だれかいい娘さん御存じありませんかい」

しばらく考えていたおすみが、箸をおいた。

「娘じゃなければだめなんですか」

「いえ、そんなことはありませんが、だれかいい人いますか」

「私じゃだめですか」

「おすみさんが？とんでもねえ。あの有名な八百膳の仲居頭をやっているおすみさんが、こんなちんけな店を手伝ってくれるなんて。いいんですかい、あまり給金も出せませんよ」

「もう八百膳のように大尽相手の商売は嫌になっちゃたんです。銀之助さんのような気持ちを持った商売をしたいんですよ」

「そうですかい、それは有り難い」

「ところで、銀之助さん。今日の夜の献立は？」

「味噌漬け豆腐と味噌田楽、そして飯は茶飯で考えているんですが」

「そうね、味噌ばかりね。味噌漬け豆腐をやめて、煮しめにしたらどうですか」

「椎茸、人参は有るんだが、八つ頭と牛蒡があまり無いな」

「あたし、買ってきます。ついでに、八百膳の番頭さんに会ってきます」

おすみは、銀之助から銭を預かって、四文屋を出た。見送った銀之助は、二階に上がり押入れの上の天袋から丸棒を取り出し、正眼の構えから素振りを数回繰り返した。

この丸棒、径は一寸程（三センチ）、長さが二尺半（約七十五センチ）で芯には、鉄材が埋め込まれている。鏝は、使用する時、簡単につけることができるものであった。

‘ビュー’ ‘ビューン’ ‘ビューン～’

（よし、まだまだ鈍っていねえな）

暮れ七ツ頃（四時）、おすみが戻ってきて、すぐに煮しめを二人で作り始めた。

「準備ができました。おすみさん、暖簾をかけてきてくれませんか。そして、掛行灯にも火を入れてきてください」

銀之助は、店の中の五つの置行灯に灯をともした。行燈の灯りは、冬の暗さに暖かさを醸し出した。

「いらっしやい」

「あれ、おすみさん。どうしたんだ」

おすみが最初に迎えた客は、おすみと同じ徳衛門長屋の住人、勇治だった。勇治は、魚の棒手振りを職としていた。

日本橋の河岸で魚を仕入れ桶にそれを入れて、天秤棒を担いで売り歩く行商人だ。

「ここで働かせてもらっているのよ。勇治さん、何にしますか」

勇治は、酒二合と味噌田楽を三本頼んだ。おすみは勝手場に戻って、銀之助に味噌田楽を頼み、酒二合を手際良く、ちろりに入れた。

「銀之助さん、勇治さんが来てくれたわ。ねえ、四文屋も魚料理を献立の一つに入れたらどうかしら。勇治さんから買うっていうのはどう」

「おいら、あまり魚料理、知らないんだ」

「あたし、多少は知ってるわ」

銀之助は考えておくと言って、味噌田楽を入れた皿をおすみに渡した。

(あれから、奴はどうとう来なかったな)

客がいなくなった時期を見計らって、銀之助はいつもより早く店を閉めた。

翌日の朝五ツ（八時）。

「おはようございます」

おすみが元気な声を出して、四文屋に入ってきた。

「おはようございます」

銀之助は、勝手場にいた。

「銀之助さん、今日の昼の献立は何ですか？」

「霰（あられ）豆腐、味噌田楽、飯物は、ねぎ飯にしようかと思うんだが。おすみさんは知っていますか」

「ええ、ねぎ飯はよく、八百膳で昔、賄い食で食べたわ。銀之助さん、あたし作っていい」

「頼みますよ」

おすみは、飯を炊く準備にかかるとともに、だし汁を作りだした。

銀之助は、豆腐をさいの目に切り、角を落としざるに入れ、水を切った。それが終わると蒟蒻を短冊状に切り、串に通して、下準備は終わった。

「さすが、おすみさんは手際がいい」

「八百膳で見よう見まねで、覚えたんですよ。本業は仲居ですけど」

四ツ半、おすみが暖簾を架けに外へ出たその時、助五郎が六尺もあろうかという背の高い侍を連れて、四文屋から三間（五メートル強）ほど離れたところに立ってこちらを見ていたが、おすみを見て、助五郎が怒鳴った。

「どけ、奴はいるか」

助五郎が、おすみを横に押した。

おすみは、よろけた。

（用心棒を連れて仕返しに来たんだわ）

二人はおすみを無視して、店に入り怒鳴った。

「銀之助、いるか」

勝手場にいた銀之助は、傍に置いておいた丸棒を背の帯に挿し込んで入口に行った。

（丸金の用心棒か、でかい男だ。注意してかからんと）

「助五郎さん、証文を持ってきてくれたんですか」

「何馬鹿なこと言っているんだ。先生、こいつ、痛い目に合わせておくんなさい」

六尺（一メートル八十センチぐらい）ほどの侍が、助五郎の前に出た。

「拙者、赤沢惣右衛門と申す。無外流を少々たしなんでおる。おさとやらの行方を言えば、痛い目に合わずに済むんだが、どうだ」

「へい、昨日もそこにいる助五郎さんに言ったんですが、あっしはなにも知らないんですよ」

「嘘つけ、どこにかくしたんだ。早く言わんと痛い目にあっても知らねえぜ」

助五郎が、横から口を出した。

「しつこいお方だ、知らないと言ったら知らないんだ」

「しゃらくせえ、先生やっちまってください」

赤沢惣右衛門は、銀之助をうながし、外に出た。銀之助は赤沢から殺気を感じ、背中の丸棒を帯から抜き取った。

「それはなんだ、それで拙者に勝てると思っているのか！」

赤沢は、そう言ったまま、いつまでたっても抜かない。

(奴は、抜き打ちか、一発でおいらを仕留めるつもりだな。ちょっと仕掛けてみるか)

銀之助は上段に構えてから、赤沢の方へ、足を摺り寄せ一気に振り下ろした。

その瞬間、赤沢は左足を一步下げ、銀之助の一撃を避けながら抜刀し、銀之助の頭上に振りかかった。

銀之助の丸棒が、赤沢の胴を先に打っていた。

‘ドスン’

赤沢は、腹を押さえてつんのめっていた。

「先生。この野郎！」

助五郎は、懐からヒ首（あいくち：つばのない短刀）を抜きだし、銀之助に飛びかかった。

銀之助は、とっさに地面に倒れ込み、一回転して体勢を立て直した。

さらに助五郎が、ヒ首を銀之助に突き刺そうとした時、銀之助の丸棒がヒ首を持っている手首を撃った。

‘ボギ’

「いてえ」

助五郎の手首からヒ首が落ち、手首から下がだらりと下がった。

銀之助は、近づいて助五郎に声をかけた。

「おい」

「おねげえだ、助けてくれ」

「証文、見せてくれねえか」

「俺は、持ってねえ」

「誰が、持ってるんだ」

「俺、俺の親父だ」

「親父さんのところへ連れて行け。二人とも、逃げるとどうなるか分かっているだろうな」

助五郎は、手をだらんと赤沢は、腹を抑えながら前のめりに、日本橋へ向かって歩き始めた。

銀之助は、傍に来ていたおすみに店を頼んで助五郎の後に続いた。

「お気をつけて」

おすみの心配そうな声が、寒風に消された。

大川端近くに出ると、銀之助たちの歩みを阻むよう、風が強まり、雪が舞い始めた。

(早く始末をして帰らないと、帰りは難儀するかもしれんな)

「もっと早く歩け」

「旦那、赤沢さんが重くてこれが精いっぱいだ。手も痛えし」

一刻ほどかかって、神田川に架かっている浅草橋を渡った。

風は止み、ほんのりと川辺は、雪が積もっていた。

銀之助は、気が張り詰めていたせいか、いっこうに寒さは感じなかった。

数町ほどで丸金の店に三人は着いた。立派な門構えであった。

(ここか、悪徳金貸しの店は)

助五郎は、玄関の戸を開けた。

「おやじ、あいつが来たぞ」

土間を蹴って、逃げるように廊下を走って行った。

助五郎と入れ替わりに、三人の用心棒が出てきた。

「おぬしが、銀之助か」

古株とみられる侍が言った時、傍に座り込んでいた赤沢惣右衛門に気づいた。

「赤沢、どうした」

腹を押さえながら、うめくように言った。

「こいつにやられた。手ごわいから気をつけろ」

「みんな、こいつをやっちめえ」

「お侍さんたち、おいら、助五郎さんの親父さんに話があって来ただけなんだ。無駄な殺生は、無しにしないか」

一番若い侍が柄に手をかけ、抜刀した。

「うるせえ」

銀之助は、後ずさりでも外に出、後ろの帯に挿した丸棒を取った。

「なんだ、俺たちと棒でやるつもりか、馬鹿にしゃがって」

抜刀した侍は、上段に構え間合いを詰めてきた。

銀之助は、中段の構えを取った。侍は、止まった、次第に呼吸の乱れが銀之助にも聞こえてきた。

呼吸の音が止まったと思いきや、相手は、真向に銀之助の頭に打ちこんできた。

銀之助も合せて、真向に打ち込んで、相手の剣を打ちはじめた。

‘バチ～ン’

音が消えた瞬間、銀之助の丸棒が相手の肩を撃っていた。

「一刀流、切落しか、小癩な」

次の相手が、肩を撃たれた侍の脇から、正眼の構えで間を詰めてきた。

(こいつは、できる。隙がない)

銀之助も相手も、身動きせずにはいたが、二人とも寒さにもかかわらずに汗をかき始めていた。

音もなく、雪がやんだ。

声がした。

「青山、もうやめろ。俺は、もうあんな悪党たちの片棒を担ぐのはもうやんなった。ここを出て行く」

青山と声をかけられた侍は、一瞬耳を疑ったようで銀之助と対峙していることを忘れ、古株の方へと視線を送った。

もうその時、古株の侍は、丸金の家の門に向かっていて、銀之助たちに背をむけていた。

「銀之助さんとやら、もうやめよう。助五郎の親父は、廊下の突き当たりの部屋にいるはずだ。気をつけてな」

青山は、うずくまっている赤沢に肩を貸して、古株を追って門から消えた。銀之助は、突き当たりの部屋の戸を開けた。

座っていた助五郎と親父が、驚きのあまり顔が凍ったようになった。

「あんたが、銀之助さんか。俺がこいつの親父だ」

落ち着きを取り戻すかのように、助五郎の親父が言った。

「へい、中へ入らせていただきます」

丸棒を左において二人の前に座った。

親父が、懐から何やら紙を取りだし、銀之助の前に投げた。

「お前さんの欲しがっていた証文だ。さっさと持って消え失せろ！」

銀之助は、手に取っておさとの父親に貸した金の証文かどうか確かめて、懐にしまった。

「これで始末をつけさせてもらいますぜ。二度とおさとさんには手を出さないでください」

銀之助は、胴巻きから出した十二両を親父の前に置いた。

銀之助が、四文屋に戻った時は、すでに昼八ツ（一時）を過ぎていた。 店に入ると、一人も客はおらず片隅に一人ぼつんと腰かけていたおすみが、急に笑顔になって銀之助に抱き着いてきた。

「銀之助さん、よかった」

銀之助はどうしていいかわからなかった。

しばらくして、顔を赤くしたおすみは、恥ずかしそうに銀之助から手を離した。

三日後、夕暮れ時。浅草の空が、朱の色に染まるには、まだちょっと早い時間、茜色の雲が箒で掃いたように浮かんでいた。銀之助とおすみは開店前の準備に忙しかった。

障子戸が開いた。

「お客さん、まだ……。橋本様、お疲れ様」

「おすみさん、ここで働くようになったのかな」

おすみは、橋本順之助の手を取り勝手場に連れて行った。

「銀之助さん、橋本様が帰って来たよ」

銀之助は、前掛けで手を拭き橋本を笑顔で迎えた。

「橋本様、ご苦労様でした」

「おさとさん、無事、上州の前橋の家まで送って来たぞ」

「ありがとうございました」

「ここを出て、半刻（一時間）ぐらいかな、後をつけてきた丸金の手先をちょっと痛い目に合わせたぐらいで、あとは順調な旅だった。じいさんとぼあさんは、おさとさんに会えて大喜びだったよ。お前さんたちにもよろしくって」

「橋本様、背の物は」

おすみが気付いた。

「おう、これはおさとさんのばあさんからの土産だ」

橋本は、背中にしょってきた野菜の入った籠を下ろした。

「銀之助さん、好きなものを取ってくれ」

「橋本様、よろしかったら、長屋のみんなに分けてやってもいいですか」

「そうか、あい分かった」

銀之助は、おさとの父親の証文を取り返したことを手短かに話し、おすみに声を掛けた。

「おすみさん、そろそろ店を開きませんか」

「はい、暖簾をかけてきます」

「橋本様、ゆっくり一杯やって行ってください」

銀之助は、行灯に火を入れながらいった。